

# コウノトリの野生復帰と観光化 —来訪者アンケート調査から—

浅野敏久・林健児郎・李 光美・塔 娜

広島大学大学院総合科学研究科

## Reintroduction project of the Oriental White Stork and tourism: a survey of visitor's attitude

ASANO Toshihisa, HAYASHI Kenjiro, LI-Guang-Mei and Ta-Na

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

### Abstract

The Oriental White Stork (KOUNOTORI) has been reintroduced into its original habitat in Toyooka city, Hyogo prefecture. This species of bird is in danger of extinction in the world, and it is protected and proliferated in this area. It is necessary to create an environment in which the birds and the local people can coexist. In order to obtain the local people's consent of the reintroduction project, it is desirable that the bird-watching tourism brings economic effects. Many tourists visit to the KONOTORI-NO-SATO Park, the shelter and research center of Oriental White Stork. The number of visitors to the park is over 400,000 after releasing those birds into the wild 2004.

The aim of this study is to survey the visitor's attitude to the reintroduction project and the ecological development policy of Toyooka city. The findings are as follows.

- 1) Many visitors come to the park mainly in order to watch the bird. The park is not one of the other destinations on the way to the famous hot spring resort, Kinosaki Onsen.
- 2) Almost all visitors know the reintroduction project of the bird before they come to the park.
- 3) Mass media, for example TV or radio, is important as the information source of visitors. Personal communication is important, too. In contrast, information from the Internet, tourist guidebook or tourist agency is not relatively referred as the information source.
- 4) Many visitors have a sense of satisfaction from experience only to watch the bird. However there are not so many visitors who want to enrich their knowledge of the bird, the project or the local people's efforts.
- 5) Many visitors agree to join or support the local activities for the ecological development. In addition, the visitors who got satisfaction from watching the bird strongly tend to agree to join or support the activities.

It is one of the problems for Toyooka's ecological development to create a good relationship between local people and tourists on a reciprocal basis.

## I はじめに

### 1) 研究の目的と背景

2005年9月に兵庫県豊岡市においてコウノトリが保護施設から、人々が普通に暮らす生活空間に放鳥された。長年にわたる保護活動の末、ようやく野生復帰の第一歩を踏み出したことになる。現在、放鳥から4年が経過した。日本での先駆的事例であったことや、人が暮らす里地での野生復帰の試みであることなどから、世界的にも豊岡でのコウノトリ野生復帰事業は注目を集めている。コウノトリと共生できる環境をつくるため（失われた環境を再生するため）に、水辺の自然再生や、環境保全型農業の推進など、農家や地域住民を広く巻き込んだ活動が行われている。そこでは単にコウノトリを野に放つという話ではなく、地域の社会経済の仕組みそのものを変えていくことが求められている。

地域住民の広範な理解と協力を得るためには、単にコウノトリ保護の必要性を訴えるだけでは不十分で、地域にとってのメリットを同時に示していかなければならない。特に経済的な効果を目に見える形で示すことが、広範な地域の構成員を継続的に巻き込むために必要である。経済的な効果を感じさせる事項として、コウノトリにちなんだ農産物等のブランド化と並び、観光化も重要な柱になっている。保護・研究施設であるコウノトリの郷公園（以下、郷公園）には、放鳥後、年間40万人の見学者が訪れるようになっており、その経済効果は30億～40億円と試算される<sup>1)</sup>。

本稿では、この観光客に注目する。先行研究との補完関係等を意識しつつ、郷公園を訪れた観光客にアンケート調査を行い、観光客が郷公園を訪れる理由、他の観光スポットとの関係、野生復帰事業への理解度・協力意識などについて、回答者の属性と照らし合わせながら、明らかにしようとするものである。郷公園に、なぜ、これほど多くの観光客が訪れるのか、やってくる人はどんな人で何を目的にしているのかは、現地を訪れて感じる大きな疑問であり、地域としても、この状況がいつまで続くのか、コウノトリと共生する地域づくりの中で観光をどの程度に評価すべきなのか、

ある程度の展望をもつべきであろう。本稿では、得られたデータの範囲内で、コウノトリとの共生をめざす持続的な地域づくりを進める中での観光客、あるいは観光が果たす役割と課題について考えてみたい。

さて、ここで簡単に豊岡市でのコウノトリの野生復帰に関する研究動向について触れておく。豊岡での取り組みは、歴史も古く、保護動物の野生復帰を地域あげて行う先駆的な事例であるため、多くの研究蓄積がある。当然、保護活動に関わる生物学的な調査研究が豊富にあるが、本稿とは直接関係ないので取り上げない。本稿の関心からすれば、コウノトリと地域の関係や、野生復帰事業の社会的側面に関する研究が参照すべき分野である。

豊岡では、科学的な野生復帰事業を進めるにあたり、兵庫県立大学自然・環境科学研究所（兵庫県立コウノトリの郷公園）が実質的なその実施主体になっている。その研究の一環として、社会科学の調査・研究もなされてきて、多くの成果を上げている。豊岡のコウノトリに関する文献の収集や整理も業務のうちであり、菊地・池田（2006）の巻末の付録に「但馬のコウノトリ関連文献」の一覧を付したり、同研究所の成果を『研究・教育業績集』をして発行したりしている。これらに紹介される一連の論文や報告により、豊岡におけるコウノトリ保護の歴史や野生復帰に向けた取り組みの経過について、詳しく知ることができる。状況報告にとどまらず、野生復帰に関連する社会的問題やコウノトリと地域のかかわり方などについても精力的に論じられている。それは豊岡に限定的話ではなく、広く人と野生生物の共存を論じるものである。現場に深く関わる中から、野生復帰とは何か、野生とは何か、共生とは何かといった重要な議論を投げかけている。

まとまった成果として、菊地（2006）がある。ここでは、コウノトリをとらえる住民や研究者のまなざしとその変化を、「ツルからコウノトリへ」というキーワードを用いて説明する。住民にとってよい意味でも悪い意味でも近い存在であった「ツル」が、科学的な保護対象となり、長らく保護増殖施設の中と外とで隔てられた存在として

の「コウノトリ」となり、そのコウノトリが再び生活空間に戻ってくるようになったのが現在であり、あらためて人とコウノトリとの関係性を再構築する必要に迫られていると論じる。研究者や住民、行政関係者など、地域のさまざまな主体が、コウノトリを介して、地域のあり方を模索しつつ関わり合っている様を読み取ることもできる。この一連の調査研究の中で重視されたのは、住民の「語り」であり、それをもとに住民のコウノトリ観、野生復帰観を読み解き、それを手がかりにして、現代における人とコウノトリの関わりを問い直している。菊地（2008）は、野生復帰事業の目標である「野生」が、現場でどのような意味でとらえられ、実践がなされているのかについて論じる。豊岡での野生復帰の取り組みは、再野生化という一方向に進んでいるのではなく、再野生化と家畜化の間を行きつ戻りつしながら進んでいると指摘する。菊地の指摘は、野生復帰の現場に当事者として関わる中からの洞察であり、説得力がある。

これらに限らず一連の研究は、コウノトリ野生復帰の現地に根ざした機関が、地域に密着して住民目線に立って行ってきた成果である。このことは言い換えると、外部から、地域や住民の視点、当事者的な方法論による研究を行うのは、手つかずのフィールドを対象とするのとは違って、難しいということでもある。

そこで、コウノトリと地域、コウノトリと人の関わりを研究する一つの着眼点として、この数年の傾向である観光化が対象として注目されることになる。放鳥後のわずか数年で観光客が40万人もの規模で訪れるようになったことは、コウノトリの野生復帰と地域再生を考える上で、注目すべき対象が新たに加わったことを意味する。急速な観光化は最近の現象であり、このこと自体が興味深いし、観光化という現象を担っている一方の主役は、域外からの観光客である。ここに、これまでの住民に注目した研究とは違って、後発の外部研究者にとって新たな課題を見いだす余地がある。しかも、観光客が多い状況は、今後しばらく続くだろうし、地域への影響も大きく、地域としてもそれを地域発展につなげようとしている。コウノ

トリと人、コウノトリと地域の関係を考えていく上で、観光客に注目すること、観光客とコウノトリ、観光客と地域住民の関係を論じることが、一つの研究課題として重要である。そのような中、2008年度には、注1に記したように、慶応大学と郷公園、豊岡市、但馬信用金庫が共同で、観光客へのアンケート調査を行い、観光化の経済効果を試算する試みがなされた。しかし、観光客を対象とする調査研究は、まだ十分とはいえない。本研究は、同じく観光客に注目し、郷公園・豊岡市の協力を得て行ったものであるが、経済効果ではなく、観光客の意識や行動を明らかにし、観光客がなぜ集まるのか、コウノトリとの共生をめざす持続的な地域づくりを進める中での観光客、あるいは観光が果たす役割と課題は何なのかについて検討すること（少なくとも検討の素材を提供すること）を目的として行うことにした。

## 2) 調査方法

情報収集の方法としては、2009年6月13日～14日の2日間実施した来訪者アンケート調査（調査票520通回収：調査票は本稿末に添付）を中心に、その他、現地での関係者からの聞き取り（2009年6月だけでなく、1998年、2003年、2007年、2009年3月と断続的に実施）や、各種文献資料による情報収集を行った。

なお、2009年6月の調査は、広島大学総合科学部の地域調査演習、同大学院総合科学研究科の課外実習の一環として、総勢25名が参加した。アンケートは、豊岡市立コウノトリ文化館<sup>2)</sup>の玄関先にテーブルを設置し、4、5名の学生がそこに立ち、訪れた観光客に呼びかけて、趣旨を説明した上で質問票に各自で記入してもらうことにした。残りの学生は関係者への聞き取りや、観光客の行動の観察、来訪する自動車の台数とナンバーの確認（どこから来ているか）などを行った。

参考までに郷公園を訪れた人がどのように動くかについて述べておく。郷公園は、165haという広大な敷地をもつが、一般の観光客が訪れる入口は一つで、ほぼ確実にコウノトリ文化館に入ってくる。そのため、コウノトリ文化館の玄関前であれば、ほとんどの観光客を目にすることができる

(そこでアンケートを実施)。来訪者のほとんどは、この施設に入り、館内の解説や展示を見、施設に隣接してある公開ケージで実際のコウノトリを見る。文化館では、ガイドにより、30分ごと等に公開ケージ前でコウノトリの生態や保護活動についての解説が行われる。解説を聞いた後、来訪者は文化館周辺を歩き、その後、駐車場に隣接する物販施設等に立ち寄って帰る。これが大方の動きになっていて、実際に165haという敷地や公園外の水田の方まで散策する人はあまりいない。

ところで、観光客は時期によって来訪目的や属性が異なり、また、その時々々の社会情勢や流行などの影響を大きく受ける。観光客の実態を知るためには、何度も繰り返してデータをとる必要がある。今回は2008年11月の調査から半年後という近いタイミングで行った観光客対象の調査である。前回との大きな違いとして、今回は、コウノトリの抱卵・巣立ち時期という、コウノトリ観光のピークにあたることがあげられる。今回のデータは、前回の調査結果を検証する上でも補完する上でも、重要な情報になる。

## II 豊岡市におけるコウノトリ野生復帰事業と観光化

### 1) 野生復帰事業

アンケートの結果を示す前に、コウノトリの保護・野生復帰活動等について、兵庫県豊岡市(2007)、菊地(2006)、菊地・池田(2006)などのほか、市役所などでの聞き取りなどをもとに概略を述べておく。

コウノトリは、体長1.1メートル、翼開長2メートル、体重4～5キログラムという大型の鳥で、ツルとは異なり分類上はサギやトキに近いコウノトリ科に属する。魚やカエル、ヘビ、昆虫などを食べる動物食で、水田や河川等を生息・採餌環境とする。松などの樹上に直径1～1.5メートルほどの巣をかけ、複数の卵を産む。ヨーロッパでは子どもを運んでくる鳥として親しまれている<sup>3)</sup>。ロシアや中国など、ユーラシア東部に生息し、生息数は2000羽程度と推定されている。国際自然保護連合(IUCN)のレッドリストで「近い将来に

絶滅の危険性が高いもの」とされ、環境省のレッドリストでも絶滅危惧IA類(ごく近い将来絶滅の危険性が極めて高い種)とされる。文化財保護法の特別天然記念物にも指定されている。

コウノトリは、世界的に絶滅が懸念されているが、かつては国内各地で生息していた。明治になり近代化が進むと乱獲され、一気に減少した。1908(明治41)年の狩猟法改正でコウノトリは保護鳥に指定されるが、時すでに遅く、生息地は明治末には豊岡盆地ばかりとなってしまった。1921(大正10)年には、コウノトリの繁殖地として出石の鶴山<sup>4)</sup>が天然記念物に指定された。たまたま最後までコウノトリが残った但馬では、昭和初期に60羽ほどが生息し、その頃が但馬コウノトリの最盛期であったとされる。

しかし、その後、第二次大戦中には、木材の大量伐採による営巣木の喪失や戦争による渡りルートへの荒廃、さらに戦後になって、農薬の使用拡大、圃場整備や河川改修による湿地の喪失など、コウノトリにとっての生息環境は劣悪化していった。農薬によりエサとなる生物が激減するとともに、鳥自身への生物濃縮も繁殖に悪影響を及ぼした。なお、個体数減少、絶滅に至る過程と要因についての物語は、いろいろな場面で解説され、広く知られている。そして、このことへの反省が、その後の野生復帰やコウノトリと共生する環境の創出を図る上で重要な意味を持ち、具体的な取り組みにつながっている。

さて、昭和初期をピークに減少の一途をたどったコウノトリは、1953(昭和28)年に、生息地ではなく種として、天然記念物に指定され、1956年には特別天然記念物となった。その前年(1955年)には、コウノトリ保護協賛会(1958年に但馬コウノトリ保存会)が、山階鳥類研究所の山階芳麿の強い依頼に応じた兵庫県知事の働きかけを背景に設立され、地元の官民一体となった保護活動が展開されることになった。

当時の保護活動は、「コウノトリをそっとする運動」や、エサとなるドジョウを県内各地から持ち寄る「ドジョウ一匹運動」(相当数の小学生が動員された)、「愛の掘金運動」など、広範な住民を巻き込んだものであった。住民運動を展開する

とともに、人工巣塔の設置なども行われたが、農薬使用など農業環境が変わらないために、生息数の減少には歯止めがかからなかった。1965（昭和40）年には、野生のつがいを捕獲し、人工飼育を行うことになった。結局、1971（昭和46）年に野生のコウノトリは絶滅してしまい、保護施設で飼育されているものだけが残る状況になった。この時点では、コウノトリの保護活動は、住民を巻き込んでというのではなく、保護施設内での技術的・専門的なものとなり、住民にとってコウノトリは身近な鳥ではなくなってしまった。

人工繁殖は長らく成功しないでいたが、1985（昭和60）年にソ連（当時）のハバロフスクから、コウノトリの幼鳥6羽が贈られると状況が変わり、1989（平成元）年、人工繁殖に取り組み始めてから24年にして、ようやく繁殖成功にたどりついた。その後は、順調に個体数を増やすことに成功し、1992（平成4）年には、飼育下のコウノトリを今後どうするのかを検討するための委員会が設置され、コウノトリを野生復帰させるという基本方針が示されることになった。

それを受けて、野生復帰の拠点となる施設として兵庫県立コウノトリの郷公園の整備（1999（平成11）年オープン）や、公園内への豊岡市コウノトリ文化館の建設などが行われた。一方、野生復帰のためには公園の外にある地域の環境整備が不可欠で、これについては豊岡市が積極的に住民等に働きかけ、コウノトリと共存できるまちづくりを仕掛けていった。2001（平成13）年から、転作田をビオトープとする事業など、生息環境を創出する試みが始められ、2008（平成20）年度末時点で市内12.5haがビオトープ水田になっている。2003（平成15）年からは、落水を延期し冬も田に水を張って生物の生息環境を維持する冬期湛水を農家に呼びかけて実施するようにもなった（2008年度末で64.8ha）。また、2002（平成14）年には、コウノトリと共に生きるまちづくりのための環境保全条例が制定され、市組織内にコウノトリを関する部署が設置された（はじめは企画部コウノトリ共生課、現在はコウノトリ共生部）。体系的な施策を展開するため兵庫県と共に各種計画の策定も行われた。2003（平成15）年には、兵庫県がコ

ウノトリ野生復帰推進計画を策定し、同時に県と市が共同して「コウノトリ翔る地域まるごと博物館構想・計画」を策定した。後者は、郷公園が立地し、放鳥の影響を強く受ける地区を対象に地域全体をまるごと博物館と位置づけ、コウノトリとの共生をテーマとする地域づくりの計画であり、その後、それに基づく具体的な事業が実施されている。

もっとも行政だけが動いたわけではなく、農業者が有機農業に取り組む<sup>5)</sup> ようになったり、環境問題への関心から、生きもの調査や環境教育活動等を行う市民グループ<sup>6)</sup> が生まれたり、草の根レベルの活動も広がった。かつての奉仕活動的な住民参加とは違う、住民の主体性がより発揮された活動となっている。

## 2) コウノトリと共生する地域づくり

次に現時点でのコウノトリと共生する地域づくりを確認しておきたい。現在の体系は一度につくられたものではなく、試行錯誤の上で今に至っている。ここでは兵庫県豊岡市（2007）に示されるコウノトリ野生復帰の体系図をもとに全体像を確認しておく。

地域づくりの視点からみた野生復帰の目的として、第一に、野生コウノトリを捕獲して人工飼育をする際に、いつかはきっと空に帰すと誓ったコウノトリとの「約束」を果たすこと（「約束」と言うまでの覚悟をもって捕獲した）があげられる。第二に、コウノトリが世界的に生息数を減らす中で、日本最後の生息地として野生生物の保護に対して国際的な貢献をすること、第三に、コウノトリも住める豊かな環境を創造することがあげられる。「コウノトリも」とするのは、コウノトリが住める環境というのは、そもそも人間が生きていく環境としても豊かですばらしいはずだという考え方にたつからである。コウノトリを自分たちの暮らしの中に受け入れるためには、生活様式や生産様式、生活文化についての見直しや改善が求められ、それを、コウノトリの野生復帰を合い言葉に行っていくことで、自分たちにとって豊かな自然環境と文化環境を創造しようという思いが込められている。

取り組みは、「自然環境の保存・再生・創造」と「文化環境の保存・再生・創造」に大別される。

前者には、里山整備や林産資源の活用など「森を多様に活用し、森の恵みを楽しむ」取り組み、氾濫原水田の湿地としての再生や円山川の自然再生など「多様な水辺を再生し、ネットワークして大きな食物連鎖ピラミッドをつくる」取り組み、環境保全型農業（コウノトリ育む農法）の普及や転作田のビオトープ化、用排水路の魚道整備など「田んぼの様子を見抜き、農業をしながら生きものを育む」取り組みがあげられる。

一方、後者には、安全・安心や保護活動への協力をアピールできる農産物や関連商品を積極的に生産・販売する「コウノトリで豊岡産品のブランド力を高め、付加価値を付けて売る」取り組み、コウノトリやその野生復帰をシンボリックな観光資源として活用し、「コウノトリと美しい街並み・農村景観で感動を与えるツーリズムを展開する」取り組み、コウノトリや環境へのこだわりを、エネルギーや廃棄物など環境関連のビジネスにつなげることを視野に入れた「自然エネルギーを利用し、楽しみながら省資源型の暮らしを実現する」試み、コウノトリとの共生をめざす豊岡ならではの、学びや遊びに焦点をあて、「豊岡の自然・歴史を見つめ直し、学び、遊びながらふるさとを楽しむ」試みがあげられる。

そして自然環境、文化環境のいずれかというわけではないものとして、「コウノトリを暮らしに受け入れながら、地域を変える」こと、「重層的に知を集積し、自立した地域づくりのための技術を確立する」ことも目指されている。

これらはいくまでも目標だが、単なるお題目にとどまらず、湿地整備や河川改修などのハード事業の進展、ビオトープ水田の拡大やコウノトリ育む方法の普及といった農家の理解・協力の広がりなど、実際に物事が進んでいて、そこが豊岡の強みといえる。実績を重ねる中で、発展的な展開が想定され、保護・増殖に専念していた段階から、野生復帰を実現する段階、そしてコウノトリも住める環境を創造する段階（現段階）、環境と経済が共鳴する段階が、まちづくりの立場からは描かれている。

### 3) コウノトリ・ツーリズム

コウノトリに関連した観光は、コウノトリ・ブランドによる農産物の高付加価値化と並んで、環境と経済の共鳴を具現化する活動の一つである。コウノトリに関連する観光を、行政はコウノトリ・ツーリズムとよび、それを「コウノトリの見学だけでなく、コウノトリを日本で最後まで育ててきた豊岡の自然・文化や、コウノトリの絶滅と復活の物語を知っていただいた上で、コウノトリ野生復帰の様々な取り組みが食や風景とつながり合っていることを深く知ってもらうもの」としている（兵庫県豊岡市、2007：14頁）。

豊岡市は、合併により城崎温泉や出石の旧城下町など、有名な観光地を市内に抱えるようになり、年間の入り込み客数は500万人を越える。そのため、郷公園に年間40万人が訪れるといっても、それが際だつというほどではないし、どれ程度がコウノトリによる効果なのかを見極めるのは困難である。それでも2004年まで10数万人規模であった来訪者が、初の放鳥（9月）が行われた2005年に、倍増の24万人、翌年は48.8万人、2007年45.5万人、2008年41.8万人と、40万人台を維持している。コウノトリの放鳥がきっかけとなって、有力な観光スポットが生まれたことは確かである。

観光キャンペーンでも、コウノトリがしばしば使われるようになり、JR西日本では、2006年に、「コウノトリを探しに行こう」（3月から）、「コウノトリを見つけましたか？」（6月から）、「さあ、出かけようコウノトリの棲む街へ」（10月から）と宣伝を重ね、2008年からは兵庫県のデスティネーション・キャンペーンで豊岡のコウノトリは取り上げられている（例えばポスターの格好の被写体にコウノトリが使われるなど）。

大手旅行代理店JTBと連携した観光商品開発も行われ、2006年から2008年にかけて1000名を超える団体観光客を豊岡市に呼び込んだ。そのツアーは、コウノトリを見学し、関連する話を聞くとともに、城崎温泉に泊まって、コウノトリ育む農法で作った米と但馬牛を食べるというもので、2007年からはNPO等の協力を得て、地域貢献型のボランティア・プログラムを体験できるようになった。ボランティアということでは、JTBの社会貢献活

動として行われる清掃ボランティア・ツアー<sup>7)</sup>が、2008年に行われ、京阪神から3回の日帰りバスツアーにのべ318名の参加者が集まった。また、国内外からの修学旅行や研修の訪問先にもなっている。郷公園周辺で自然観察や風景に隠された意味などを解説するガイドも人気が出てきているようで、コウノトリを見るというだけでなく、保護活動や野生復帰や、コウノトリの生態、豊岡盆地の自然環境などについて学ぶことなどが観光のメニューになっている。

前述の大沼(2009)の試算<sup>8)</sup>では、観光客の平均支出額は平均約34,000円(宿泊費20,000円)、コウノトリを目的とした旅行者をアンケート結果から45万人の施設来訪者の2割と見なすことで、観光客の支出は年間およそ30億円程度と見こまれ、波及効果分を上乗せすればコウノトリ観光の経済効果は40～45億円程度になるのではないかと、中間報告的な値が示されている。

筆者は、郷公園がオープンする前の1998年、放鳥前の2003年、放鳥後の2007年、2009年に豊岡を訪れて、施設を見学したり、関係者の話を聞いたりしているが、コウノトリをめぐる状況変化の早さを実感した。放鳥までは、観光による地域活性化はあまり現実味がなく、放鳥に向けていかに住民の理解を得るかが大きな課題で、農家も不安や不信感を抱きながら協力している(むしろごく一部の農家が協力している)印象を受けたが、その後は、コウノトリ本舗などの物販施設が充実し、実際に観光客が多数訪れるのを目の当たりにすると、コウノトリとの共生はすでに前提になっていて、ブランド化や観光により、いかに経済効果を生むのかが地域課題になっているように思えた。

### Ⅲ コウノトリ見学に訪れる人の意識と行動

#### 1) 来訪者の属性と観光行動

本章では、アンケートの結果について、1) 一般的な特徴、2) コウノトリ及び野生復帰の理解度と施設等の評価、3) 豊岡での取り組みへの来訪者の参加意向に分けてまとめる。

回答者数は2日間で520名(1日250名前後)、調

査への協力を呼びかけて、協力してもらえた人を対象としている。調査2日目に郷公園を訪れた自動車の台数を数えたところ、乗用車424台、バス31台であった。人数は数えていないが、2000～3000人程度の来訪者があったとみると、来訪者の1割程度から回答を得たと考えられる。

このことを念頭におきつつ、まずは回答者の属性について述べる。性別は、男性46.3%、女性53.7%でほぼ半々である。年齢は、20歳未満が2.4%、20-39歳が21.0%、40-59歳が35.5%、60歳以上が40.9%となり、中高年層がかなりの割合を占める。実際に来訪者には中高年層が多かったので、本調査が中高年齢層に著しく偏っているということはない。職業は、会社員・公務員が35.2%、主婦・主夫が20.2%、自営業・事業主・農業が16.0%、定年後が10.2%、パート・アルバイトが9.2%であった。

旅行形態としては、家族旅行が54.7%と半分以上となり、次いで数人のグループ旅行が23.0%、団体旅行が17.6%、個人旅行は4.6%であった。団体旅行客からも多くの回答を得たが、一度に全員答えてもらうことが難しく、団体旅行では時間的制約から協力してもらえないこともあり、観光客数全体からすると、今回の調査では団体旅行者の回答がやや少なくなった可能性がある。この点は以下の分析において考慮する必要がある。

旅行日数については、1泊2日が54.7%と半分以上を占め、日帰り38.4%がこれに次いだ。2泊3日が7.6%、例外的に1週間という回答者もいたが、ほとんどが2泊3日までということになる。2008年11月の調査でも割合は別として順番はこの順であった。

図1に旅行目的(複数回答)を示したが、旅行目的の第1位は、コウノトリ見学(51.0%)では

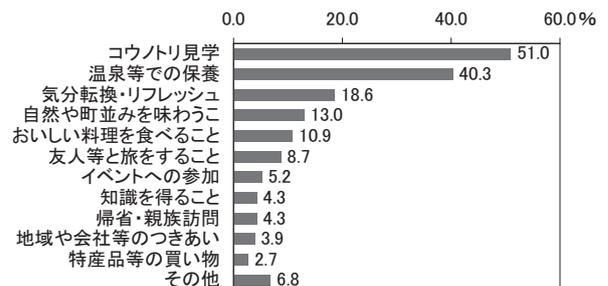


図1 今回の旅行目的

半数の人が、コウノトリを見ることを目的としている。これは2008年11月の調査時に、旅行者の2割がコウノトリ見学であったという結果と比べると大きく異なる。その理由として、今回はコウノトリの巣立ちの季節で、マスコミで報道もあり、コウノトリ見学のハイシーズンにあたったことがあげられる。晩秋には、温泉に入ってカニを食べることを目的にする人が多くなると予想されるので、今回の違いは当然ともいえる。いずれにしても、コウノトリ見学を主目的にする人が多いことは明らかで、観光客は、温泉のついでではなく（温泉保養を目的にあげた人も4割と多かったが）、コウノトリを目指して旅程を組んでいる。

なお、日帰り観光客の69.4%が、旅行目的にコウノトリ見学をあげている。1泊以上の宿泊観光客では、温泉での保養を目的にする人が多い（62.4%）が、コウノトリ見学を目的にあげる人も39.2%になった。

また、訪問先としては（図2）、城崎温泉（42.4%）、出石の旧城下町（38.5%）、玄武洞（19.8%）の割合が高く、比較的近い範囲にまとまっている。郷公園、城崎温泉、出石、玄武洞以外の豊岡市内の観光スポットはあまり訪問されておらず、むしろ、その他（13.2%）として天橋立や湯村・浜坂温泉など日本海側の広域的な観光地をめぐる途中で、ここに立ち寄った人も目立つ。郷公園以外の立ち寄り先として、もっとも多い城崎温泉でも4割にとどまるということは、観光目的地として郷公園が積極的に選ばれているということの現れであり、前述の旅行目的としてコウノトリを見ることを重視されていることを裏付ける。すなわち、ここに立ち寄る観光客の多くはコウノトリを見るために豊岡に来ているのである。

次に、郷公園を訪れる理由について、少し詳しく尋ねてみた（図3）。「コウノトリへの興味・関

心から」という答えがもっとも多く、47.3%となった。「有名な観光スポットだから」という理由が10.4%となる一方、「自然や環境について学ぶこと」（7.2%）や「鳥の写真を撮ること」（3.2%）は少なく、コウノトリを見ることを旅行目的にしている人の多くは、見てみたいということ以上に掘り下げた動機を必ずしも持っていない。コウノトリを目的とするが、話の種に見に行ってみようという程度の動機である。もしそうなら観光客が今の水準をいつまで維持できるかが、今後の課題になるだろう。

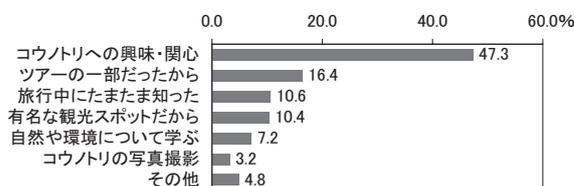


図3 コウノトリの郷公園を訪れた理由

しかし、郷公園を訪れるリピーターは少ない。今回の調査で、初めて来たという人は76.3%と高率だが、2回目が9.7%、3回目が7.1%、それ以上が6.9%と、4人に1人がリピーターである。今回の調査では、豊岡市内に住んでいる回答者が7.2%いるが、リピーターの割合はその3倍以上あり、市内を越えた地域から広くリピーターを集めている。2008年の調査では、リピーターが7割以上という結果が示されている。これは理由不明ながら、今回の結果と大きく違う。

郷公園についてどのように知ったのかという質問（複数回答）に対して、もっとも多かったのが、テレビ・ラジオを通じての46.4%、次いで新聞・雑誌が25.2%と高い（図4）。コウノトリや郷公園の情報は、マスコミを通じて得ている。コウノトリの野生復帰について、しばしばニュースで取り上げられ、最近新潟のトキの放鳥との関連でも

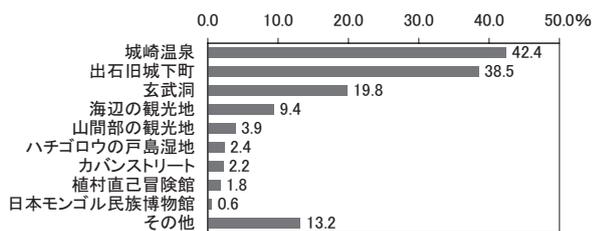


図2 今回の旅行の訪問地（郷公園以外）

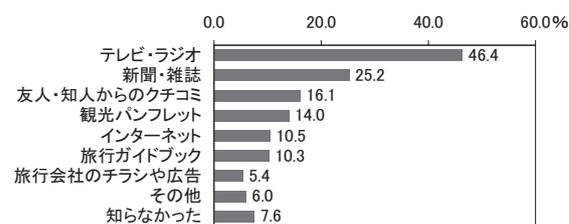


図4 コウノトリの郷公園についての情報源

豊岡が言及される。マスコミによる宣伝効果はかなり大きい。観光パンフレット、旅行会社の広告、旅行ガイドブック、インターネットも情報源になっているが、1割前後にしかなくない。その中で、友人・知人からのクチコミ情報が16.1%と3番目に高率になった。マスコミとクチコミが集客に寄与している。

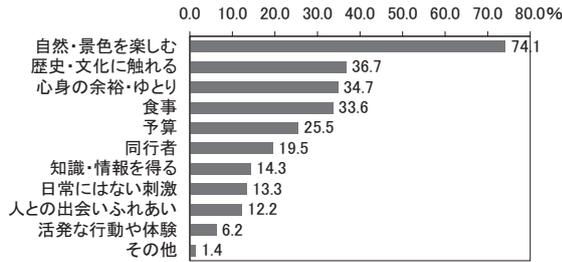


図5 あなたが旅行で重視すること

来訪者の観光についての志向性や、環境問題への関心についても尋ねてみた。旅行で重視することは、図5に示したとおりで、「自然・景色を楽しむこと」の割合が突出して高い(74.1%)。郷公園周辺や円山川など、広々としてのどかな農村景観・水辺景観は観光資源としての価値が高く、旅行者の志向性に応えている。「歴史・文化に触れること」、「心身の余裕・ゆとり」、「食事を重視する」との回答が、これに続き、「知識・情報を得る」、「日常にはない刺激」、「活発な行動や体験」といった積極的・行動的な旅行を志向する傾向は弱い。また、環境問題や自然保護への関心は、「とてもある」、「まあある」をあわせると9割を超えた。

本節の最後に回答者の出発地を示す。兵庫県が42.1%で最多で、内訳は神戸市9.9% (兵庫県の23.5%)、豊岡市7.2% (同17.1%)、姫路市5.0% (同11.8%)であった。兵庫県に次いで多いのは大阪府で27.0%である。その他、地方別にみると、兵庫・大阪を除く近畿地方が12.4% (京都府5.4%、滋賀県3.4%、奈良県2.4%、和歌山県1.2%)、中国地方5.0%、北陸地方(福井県から新潟県まで)4.4%、北陸以外の中部地方3.0%、九州地方2.6%、四国地方1.8%、関東地方1.6%であった。基本的に近畿を中心に西日本一帯を集客圏としている。ただし、西日本一帯への広がりは一時的<sup>9)</sup>で、郷公園は、京阪神都市圏レベルの観光地とみるのが適

当であろう。

## 2) コウノトリ及び野生復帰への理解度と評価

コウノトリ野生復帰の取り組みについて、以前から知っていたかを尋ねたところ、57.9%が知っていた(ある程度の内容も知っていた)と答え、話には聞いていた(野生復帰の努力をしていることは知っていた)と答えた29.5%とあわせると、9割近くの来訪者が野生復帰の取り組みについて知っていた。一般的に観光で訪れる先の行政や研究機関が行っている仕事について、観光客がどの程度知っているかを想像すると、この数字は相当高いといえる。マスコミを通じて情報を得ているという、先の結果と結びつけて理解すべきである。コウノトリを見に行くこともさることながら、コウノトリの野生復帰の現場に行ってみることが観光の目的になっている。

では、実際に郷公園を訪れた後での評価(以下、満足度)はどうか。「とても満足」が33.1%、「まあ満足」57.9%、「どちらともいえない」6.8%、「少し物足りない」2.6%、「かなり物足りない」0.4%という結果で、ほとんどの人が郷公園に満足している。この結果については、後で他の回答の傾向と重ねて検討してみたい。

その前に、コウノトリについてもっとも印象に残ったことは何かについて尋ねた結果を示しておく。「実際に見た姿」が66.3%と飛び抜けて高く、3人に2人が実物を見たことを評価している。百聞は一見に如かずである。次いで、「野生復帰の取り組み」26.5%、「コウノトリの生態」15.6%、「野生復帰に関わる人たちの思いや熱意」13.4%、「地域社会の共生に向けての努力」11.0%、「生息環境の変化」10.2%となった。野生復帰の取り組みやその背景、それに関わる人々などにも、感銘を受けている。今後の観光や情報発信を考えていく際には、コウノトリの見せ方をどうするのか(印象第1位の項目をどうするのか)とともに、野生復帰の取り組みや住民・研究者の関わり等の情報をどうアピールするのか、2位以下の数字をあげていくように努力するのかしないのかが、一つのポイントになる。

さて、前述の郷公園についての満足度に関し

て、いくつかの項目とクロス集計した結果をみてる。比べた項目は、性別と年齢層、郷公園を訪れた理由（公園訪問理由）、野生復帰についての事前に知っていたか（事前の知識）、訪れてもっとも印象に残ったこと、事前の情報源である。満足度について、「かなり物足りない」と答えた回答数がとても少なかったため、「少し物足りない」とあわせて「物足りない」にまとめた。また、クロスするいずれかの質問で無回答がある場合は集計から除いた（そのためクロス集計した場合の回答割合とクロス集計しない場合の回答割合では多少の違いがある）。複数回答でないものについては、独立性の検定を行った。

まず、満足度について、性別による差は認められなかったが、年齢層との間に1%有意で関連が認められた。20歳未満で「とても満足」の割合が高く、「40-59歳」でそれが低くなった。ただし、20歳未満の回答者は数少なかったため、注目すべき差とはいきれない。

満足度と公園訪問理由は5%有意で関連が認められた（表1）。項目間の有意差判定を行うと、コウノトリへの興味・関心を動機とした人は、「とても満足」を選んでいる割合が高く、ツアーの一部として立ち寄った人は「とても満足」を選んだ割合が低かった。有意差判定ではマークがつかなかったが、自然や環境について学ぶという動機を

持った人も「とても満足」を選んだ割合が高く、逆に、写真撮影を動機とした人の「とても満足」の割合は低かった。自由回答にもケージ内のコウノトリはほとんど動かず物足りなかったという記述があり、鳥の写真をとる趣味の人には、郷公園では物足りないだろうと予想できる。とはいえ、コウノトリを目的にきた人は、かなり満足することができ、何となく来た人とマニアックな動機を持った人は「まあ満足」という感想になっている。あえて見に来た人を裏切らない施設になっていると評価できる。

コウノトリや野生復帰についての事前の知識と満足度は有意な関連は認められなかった。

設問が複数回答なので、独立性の検定を行っていないが、見学後、コウノトリについて印象に残っていることと、満足度の関係について、印象に残った項目ごとに、満足度の選択割合を集計した（表2）。コウノトリの実際の姿をあげた人は、「とても満足」の割合が高かった（34.3%）。「コウノトリの生態」（37.2%）と「野生復帰に関わる人たちの思いや熱意」（41.8%）をあげた人も、「とても満足」と答えている。逆に、「何ともいえない」、「物足りない」を選んだ人は、「生息環境の変化」と「野生復帰の取り組み」と答えた人に比較的多かった。

郷公園についてどのように知りましたかという情報源についての設問に関しては（表3）、テレビ・ラジオ、旅行ガイドブック、友人・知人からのクチコミと答えた人は、「とても満足」を選んだ割合が高く、インターネットと観光パンフレットと答えた人はその割合が低かった。

観光パンフレットは誇張したところがあるし、インターネットではかなり詳しい情報が得られるので現地ですれを上回る情報が得られないということかもしれない。クチコミを選んだ場合がもっとも「とても満足」の割合が

表1 満足度と公園訪問理由の関係

	とても満足	まあ満足	何ともいえない	物足りない
コウノトリへの興味・関心	39.5 **	55.0	2.5 //	3.0
自然について学ぶ	36.7	53.3	6.7	3.3
コウノトリの写真撮影	21.4	78.6	0.0	0.0
有名な観光スポットだから	32.6	53.5	14.0 *	0.0
ツアーの一部	14.9 //	70.1 *	9.0	6.0
旅行中にたまたま知った	32.6	58.1	9.3	0.0
その他	31.6	47.4	15.8	5.3

\*\*プラスに有意(回答者が多いことで有意) \*の数是有意差の度合い  
//マイナスに有意(回答者が少ないことで有意) /の数是有意差の度合い  
「物足りない」は質問票の「少し物足りない」と「かなり物足りない」をあわせたもの

表2 満足度と印象に残ったことの関係

	とても満足	まあ満足	なんとも	物足りない
実際に見た姿	34.3	58.4	5.2	2.1
コウノトリの生態	37.2	56.4	5.1	1.3
生息環境の変化	27.5	52.9	11.8	7.8
野生復帰の取り組み	28.2	64.9	3.8	3.1
地域社会の努力	31.5	63.0	3.7	1.9
人々の思いや熱意	41.8	53.7	4.5	0.0

「物足りない」は質問票の「少し物足りない」と「かなり物足りない」をあわせたもの

高かったが、「何ともいえない」と結論を保留する人も他より多かった。

3) 保護活動と自らの関わり

アンケートの最後に、回答者自身が、コウノトリと共生する地域づくり活動に参加したいかどうか、協力するかどうかを尋ねた。その結果を表4に示した。質問は、表側に記した5つの活動について尋ねている。もっとも支持(「かなりそう思う」と「ややそう思う」の合計)が高かったのは、「コウノトリ観光の良さを人に伝える」(82.7%)で、住民ではない観光客なので当然ともいえるが、郷公園来訪者への情報源としてクチコミが無視できない(来訪者の情報源の16.1%)ことを考えると、現実問題として大切である。実際に参加するかどうかは別にして、これとほぼ同じ傾向を示した(81.1%)のが、「里山や水辺環境づくりの市民活動」であった。これに次いで、「学びや遊びの活動を支援する」(71.0%)の割合も高かった。実際の観光で、清掃ボランティアツアーの需要があることや、公園周辺での自然観察などのメニューに人気があること等を考慮すると、体験的なプログラム、多少でも野生復帰に関わった気になれるプログラムが用意されると観光行動の幅が広がり、郷公園の観光資源的な価値を高めたり、人と生きものの共存や地域社会の問題についての意識啓発につなげたりできる。

一方、評価が低かった(「あまり思わない」と「全

くそう思わない」の合計が大きかった)のは、「コウノトリ・ブランドの商品の購入」で、参加したい(応援したい)と思わない割合が、49.4%とほぼ半分になった。支持する人は42.9%なので支持しない人の方が多い。地域にとって経済効果が目に見えるようになることが、持続的にコウノトリと共存する地域づくりを進めていく上で、幅広い住民の理解と協力を得るために不可欠であり、ブランド化による特産品等の販路拡大は重要である。そして、それは観光客にもっとも期待する部分であるといえるが、そこでの支持がもっとも得られなかった。野生復帰の取り組みと地域経済の関係について、来訪者に情報をどう伝えるか、今後の検討課題である。

「募金への協力や市民団体の会員になること」は、中間に位置し、支持する人が58.7%、支持しない人が32.9%であった。これは参加の程度がより主体的になるので、環境づくりの市民活動への参加や、学びや遊びの活動を支援するよりは、参加したい(応援したい)割合が低くなるのは順当な結果といえる。むしろ支持する人が6割もいることを、どう考えるかが大事であろう。

この参加意向についても、他の設問とのクロス集計を行った。対象とした項目は、性別と年齢層、それと前節の満足度である。ここでも前節同様、無回答が含まれるサンプルを集計から除き、回答数の少ない選択肢(満足度の「少し物足りない」と「かなり物足りない」、参加意向の「あまり思わない」と「全く思わない」)は合算してクロス集計を行った。その上で独立性の検定を行った。なお、年齢層については、参加意向を尋ねた5項目について、いずれも有意となる関係は認められなかった。今回の調査では、参加意向と年齢は結びつかなかった。

まず、「里山や水辺環境づくりの市民活動」への参加意向について、性別は5%有意で男性の参加意向が高く、満足度は1%有意で「とても満足」と答えた人の

表3 満足度と情報源の関係

	とても満足	まあ満足	なんとも	物足りない
テレビ・ラジオ	34.9	60.7	2.2	2.2
インターネット	26.9	67.3	3.8	1.9
新聞・雑誌	33.3	57.7	4.9	4.1
旅行ガイドブック	34.0	62.0	2.0	2.0
観光パンフレット	26.0	64.4	4.1	5.5
クチコミ情報	38.0	51.9	8.9	1.3

「物足りない」は質問票の「少し物足りない」と「かなり物足りない」をあわせたもの

表4 コウノトリと共生する地域づくりへの参加・協力意向

	かなりそう思う	ややそう思う	あまり思わない	全くそう思わない	どちらでもない
里山・水辺環境づくりの市民活動	28.6	52.5	11.0	1.1	6.8
コウノトリ・ブランドの商品購入	6.5	36.4	42.9	6.5	7.7
コウノトリ観光の良さを伝える	29.8	52.9	12.1	0.7	4.5
募金協力や市民団体の会員になる	9.4	49.3	29.7	3.2	8.3
学びや遊びの活動支援	18.8	52.2	20.6	1.6	6.9

参加意向が高くなった(表5)。「まあ満足」と答えた人は、積極的な参加意向は示していない。また、満足度を「何ともいえない」と保留した人は、参加したくないと答える割合が高かった。男性の参加意向が高くなるのは、一般的に里山活動などで広く認められる傾向である。

「コウノトリ・ブランドの商品の購入」については、性別による差は認められず、満足度について1%の水準で有意となった(表6)。これも前問と同様に、とても満足した人が積極的に買ってよいという意思を示した。ここでは「まあ満足」と答えた人でも、買いたいとは思わないと答える割合が高く、56.2%と高率になった。

「コウノトリ観光の良さを人に伝える」について、性別は1%有意で、男女間に差が見られた。女性が他の人に伝えると答えた割合が高いのに対し、男性は他の人に伝えようと思わないと答える割合が高かった。コウノトリ観光の情報源として、クチコミが重要な情報源であり、しかもクチコミで訪れた人の満足度が高いという、既述の結果とあわせて今後の対応を考える必要がある。

満足度とのクロス集計結果(表7)は、これまで同様に、1%有意で関係が認められた。とても満足と答えた人は、積極的に人に伝えようと思え、まあ満足と答えた人は一段階消極的な意思表示となっている。

表5 里山・水辺環境づくりへの参加意向と訪問満足度の関係

満足度 \ 参加意向	かなりそう思う	ややそう思う	そう思わない	どちらでもない
とても満足	42.6 **	46.6	6.1 //	4.7
まあ満足	23.6 //	55.5	12.9	8.0
何ともいえない	7.4 /	55.6	33.3 **	3.7
物足りない	20.0	53.3	13.3	13.3

注記は表1と同じ

表6 コウノトリ・ブランド商品の購入意向と訪問満足度の関係

満足度 \ 協力意向	かなりそう思う	ややそう思う	そう思わない	どちらでもない
とても満足	14.7 **	44.1 *	35.3 //	5.9
まあ満足	2.0 //	34.5	56.2 **	7.2
何ともいえない	7.1	14.3 /	60.7	17.9 *
物足りない	7.1	42.9	35.7	14.3

注記は表1と同じ

表7 コウノトリ観光のクチコミPRと訪問満足度の関係

満足度 \ 協力意向	かなりそう思う	ややそう思う	そう思わない	どちらでもない
とても満足	46.6 **	43.9 //	5.4 //	4.1
まあ満足	22.0 //	60.6 **	13.0	4.3
何ともいえない	14.3	35.7	42.9 **	7.1
物足りない	21.4	42.9	28.6	7.1

注記は表1と同じ

表8 募金協力や市民団体の会員になる意向と訪問満足度の関係

満足度 \ 参加意向	かなりそう思う	ややそう思う	そう思わない	どちらでもない
とても満足	17.0 **	57.4 *	18.4 //	7.1
まあ満足	5.6 //	48.2	38.2 **	8.0
何ともいえない	11.1	25.9 /	51.9 *	11.1
物足りない	0.0	35.7	42.9	21.4

注記は表1と同じ

表9 学びや遊びの活動支援意向と訪問満足度の関係

満足度 \ 参加意向	かなりそう思う	ややそう思う	そう思わない	どちらでもない
とても満足	29.2 **	54.2	12.5 //	4.2
まあ満足	13.2 //	54.8	24.0	8.0
何ともいえない	14.3	28.6 //	50.0 **	7.1
物足りない	23.1	38.5	23.1	15.4

注記は表1と同じ

「募金への協力や市民団体の会員になる」という参加について、男女差はあまり認められず、満足度については、1%有意で関係が認められた(表8)。とても満足と答えた人の参加意向が高く、まあ満足程度の場合は、参加したいと思わないという消極的な回答の割合が高くなった。

「学びや遊びの活動を支援する」についても、性別は関係なく、満足度について1%有意で関係が認められた(表9)。「とても満足」と答えた人に協力してもよいと答える割合が高く、何ともいえないと満足度の回答を保留した人は、協力したくないと答える割合が高かった。

5つの項目について、いずれの場合も、施設を訪れた満足度と、コウノトリと共生する地域づくり活動への共感度（参加意向・協力意向）の関連が深いことがわかった。特に、とても満足と答えた人は、全ての項目について、参加したい（応援したい）と答えた人の割合が、他と比べてかなり高くなった。「まあ満足」とか「何ともいえない」と答える人は、項目によって、やや消極的な参加意向を示したり、参加したくないと答えたりしている。訪れた人に、大いに満足してもらわないと、次につなげる力として期待しにくいと考えられる。

満足度について、現時点では、来訪者がコウノトリの実物を見ただけで満足している面がある。長期的な観光の継続性や観光を地域経済に波及させること、コウノトリと共生する地域づくりに外の視点を取り入れたり、共生の思想を外に伝えていったりすることまで考えると、今後の工夫・検討の余地がある。

#### IV おわりに

本稿は、6月のわずか2日間ではあるが、郷公園を訪れた観光客を対象としたアンケート調査の結果を取りまとめたものである。調査では、なぜここに年間40万人もの人が訪れるのか、訪れる人はどのような人で何を目的に来るのかに疑問をもち、それを探りつつ、豊岡で進められているコウノトリと共生する地域づくりにおける、観光、観光客の意味や約割、地域と観光客の関わりについて考えることを目的にした。

なぜ多くの人々がやってくるのかについては、調査した2日間、調査時のやりとりや、来訪者の行動や会話などに注意してみたが、よくわからず、次から次に人がやってくることに驚くばかりであった。ただし、調査結果からどんな人が来ているのか、どんな感想をもったのかについては見えてきたこともある。まず客層として、主に京阪神圏（広くとれば西日本一帯）から、日帰りないし1泊2日程度の泊まりがけで、家族や数人のグループで訪れる層が来訪者の中心になっている。旅行において、自然や風景を楽しむ志向性が高く、刺

激やアクティブな活動を求めるより、安らぎやゆとりを志向する傾向が強い。あわせて、自然や環境問題への関心も高い。

来訪者の多くがコウノトリを見ることを旅行の目的にあげている。コウノトリを見るために郷公園を訪れている。けっして、温泉観光のついでにコウノトリを見に来たり、ツアーの休憩をかねてたまたま立ち寄ったりする観光客が多数派ではない。調査時期によって大きな差があるが、リピーターも少なくない。豊岡市や郷公園が、コウノトリの保護増殖、野生復帰の活動をしているところだということは、来訪者のほとんどがそもそも知っており、それらの情報はマスコミを通じて得ている場合が多い。

ただし、コウノトリを見に来ている観光客の目的は、コウノトリを見ること以上でも以下でもない場合が多い。積極的に学ぶことを来訪目的にあげた人は少なかったし、見学後の感想では、印象に残ったこととして、コウノトリの姿を見たことをあげた人が圧倒的であった。とはいうものの、来訪者は、コウノトリを実際に見たこと、現地を訪れたことで、十分に満足を得ていて、郷公園の満足度評価は高い。検討すべきことは、地域として、その状況に甘んじてよいのかどうかということである。

来訪者に、豊岡のコウノトリと共生する地域づくりに関わる活動に、参加（支援）する意思があるかどうかを尋ねたところ、リップサービスの部分を割り引く必要はあるが、参加（支援）意向は高い。この地を訪れた者として、郷公園の良さを人に伝えることは8割以上の人に支持される。郷公園について、友人・知人のクチコミ情報が、テレビや新聞等のマスコミ情報について重要な情報源となっているので、このことは心強い。また、里山・水辺環境づくりの市民活動への参加、学びや遊びの活動支援に関わりことへの参加（支援）意向も高かった。このような自らが活動に参加する（体や頭を働かす）ことは高く支持される一方で、募金への協力や市民団体の会員になることは多少消極的になり、地元として観光客に期待するコウノトリ・ブランド商品の購入については、支持しない人の方が支持する人よりも多くなった。

環境関連の活動を地域経済に結びつけることの難しさの一端が垣間見られる。

この参加（支援）意向について、郷公園訪問の満足度評価と照らし合わせると、訪れた結果を「とても満足」と答えた人は、全ての項目について、参加（支援）意向が有意に高くなるという結果が得られた。ごく単純に考えれば、施設訪問の満足度をいかに高められるかが、地域への観光の波及効果を高めることにつなげるために大事といえる。

観光客を地域づくり活動に参加させるというのは極端な話であるが、これを、コウノトリと共生する地域づくりのために、外部者とどのような関係をつくっていくかという問題ととらえれば、一般性をもつ問題になる。これまでは外部者の多くが研究者や専門家であった。それが最近の急速な観光化の結果、コウノトリに関心を持つ多数の外部者がやってくるようになり、地域としてそれらの人とどのような関係をつくっていくのかを考える必要が出てきたということである。観光地を訪

れ、地域の産物を積極的に消費するお金を落とす存在としてのみ期待するのか、地域づくりの活動に可能な範囲で巻き込むことを狙い、新たな担い手ないし応援団として期待するのか、観光客を受け入れる側としての議論が必要であろう。

また、野生復帰の先進地、人と野生動物の関わり方を模索してきた地域として、この問題についての議論や情報を社会全体に投げかけていく責任もある。その場合、情報発信対象のひとつとして、観光で訪れる人を想定できる。単に鳥を見るだけではなく、野生動物と共存する社会とは何か、どのような問題を地域社会が抱えるのかなどを、来訪者に考えさせる環境を整えることも大事であろう。現状では、そのようなことに訪れる人のニーズはあまりないかもしれない（短期的にはコウノトリの見せ方を工夫することの方がニーズに合致するかもしれない）が、コウノトリの姿を見せるだけではなく、コウノトリと人間の関係を考えさせる場・機会をつくり出していくことを、今後の豊岡コウノトリ観光に期待したい。

## 謝

調査にあたって、忙しい中、諸々の便宜を図っていただいた兵庫県立大学（郷公園）の菊地直樹氏、および豊岡市コウノトリ共生課の上田篤氏、中奥政明氏をはじめとする豊岡市の方々には大変お世話になりました。また暑い中、アンケートに答えていただいた多くの方に、この場を借りて御礼申し上げます。

なお、本研究は、大学院教育改革支援プログラ

## 辞

ム「文理融合型リサーチマネージャ養成プログラム」の一部として行った。また、調査は総合科学部の地域調査演習Iを兼ねて実施した。受講した3・4年生には、ともに議論しながら調査票を作成するとともに、調査時には炎天下でのアンケートの実施やデータの入力を演習の一環として行ってもらった。

## 注

- 1) 2008年に大沼あゆみ氏を責任者とする慶應義塾大学の調査グループが、郷公園、豊岡市、但馬信用金庫とともに観光客を対象としたアンケート調査を行い、その経済効果を試算している。詳細な結果はまだ示されていないが、40～45億円規模の経済効果があることが、郷公園が企画実施した連続講座の中で示されている（大沼，2009：158頁）。
- 2) 郷公園は兵庫県立で、保護・研究機能も兵庫県立大学が担っている。郷公園内にあってもっとも観光客の立ち寄る施設がコウノトリ文化館であるが、こ

れは豊岡市立の施設となっている。

- 3) ヨーロッパのコウノトリは、ユーラシア東部のものと違い、くちばしの赤いシュバシコウである。
- 4) ここでは1904（明治37）年に雛の繁殖と日露戦争勝利が結びついて「瑞鳥」ブームが起きたことから、見物客が増えるとともに、営巣地付近が保護された。
- 5) 1997年には、豊岡あいがも稲作研究会が発足し、アイガモ農法による有機農業が導入され、その後の環境保全型農業の先駆けとなった。その後、これ以外にもいろいろな手法で環境保全型農業が試みら

れ、要件に合致した無農薬・減農薬農法を「おいしいお米と多様な生き物を育み、コウノトリも住める豊かな文化・地域・環境づくりを目指す農法」（県豊岡農業改良普及センター）として「コウノトリ育む農法」に認定されている。2008年度でコウノトリ育む農法による水稲作付面積は183.1ha（無農薬44.1, 減農薬139.0）にも及ぶ。

- 6) 1998年、豊岡盆地の生き物調査を通じて市民の立場からコウノトリについて考えるコウノトリ市民研究所がつくられた。それまで自然保護運動などに関わっていた人たちなどよりなるこのグループは、2004年にNPO法人となった。この他に、2001年には放鳥された後の追跡調査を行うコウノトリ・パークボランティア、2007年にはコウノトリの生息地保全を目的とするコウノトリ湿地ネットがつくられて活動している。

## 文

- 大沼あゆみ (2009):コウノトリが環境と経済をつなぐ。菊地直樹編 『「コウノトリと共生する地域づくり講座」報告書』, pp.141-171.
- 菊地直樹 (2006):『蘇るコウノトリ 野生復帰から地域再生へ』 東京大学出版会.
- 菊地直樹 (2008):コウノトリの野生復帰における「野

- 7) JTB主催の「清掃ボランティアツアー in豊岡」。JTBが20年以上にわたって全国で実施しているもので、2008年に豊岡市が対象地となった。コウノトリに関連する湿地などの清掃活動で、参加者は2000円の参加費（それは豊岡市のコウノトリ基金への寄付になる）だけで、ツアーに参加でき、現地での清掃活動の後は、城崎温泉での入浴や昼食をJTBの負担で楽しむことができる。
- 8) 最終的な報告書ないし論文は未見（未刊行）のため、ここに示す数字は、大沼（2009）の講演記録に基づくものである。なお、この講演時に示されたデータは調査の中間報告的なものであるため、最終的に数字が見直されることもありうる。
- 9) 2009年春から休日の高速道路料金が割り引かれることになり、それ以前よりは広域から人が訪れるようになったことも考慮しなければならない。

## 献

- 生』, 環境社会学研究, 14, pp.86-100.
- 菊地直樹・池田 啓 (2006):『但馬のコウノトリ』 但馬文化協会.
- 兵庫県豊岡市 (2007):『コウノトリと共に生きる豊岡の挑戦／コウノトリ百年の歴史』 兵庫県豊岡市.

### コウノトリの野生復帰と観光についてのアンケート

私たちは、広島大学総合科学部の学生です。地域調査演習という実習の一環として、コウノトリ見学に来られた方の観光行動と意識について教えていただきたいと考えています。お楽しみのところ、お邪魔をして大変申し訳ありませんが、なにとぞご協力下さい。成果については、豊岡市等に伝えて、今後の参考にしてもらいたいと思っています。よろしくお願ひします。

広島大学総合科学部 地域調査演習受講者一同（実施責任者 淺野敏久）

#### 問1 今回の旅行の目的は何ですか。（複数回答可）

1. 温泉等での保養
2. 自然や町並みを味わうこと
3. コウノトリ見学
4. イベントへの参加
5. 知識を得ること
6. 気分転換・リフレッシュ
7. 友人等と旅をすること
8. 帛省・親族訪問
9. 地域や会社などのつきあい
10. おいしい料理を食べること
11. 特産品などの買い物
12. その他（ ）

#### 問2 どなたと参加されましたか。

1. 個人
2. 家族
3. 教人のグループ
4. 団体

#### 問3 今回の旅行の旅程はどうなっていますか。泊 且 （日帰りの方は0泊として下さい）

#### 問4 今回の旅行における訪問先について、当てはまるもの全てに○をつけて下さい。

1. 城崎温泉
2. 出石
3. コウノトリの郷公園
4. ハチゴロウの戸島湿地
5. 玄武洞
6. 植村直己冒険館
7. 日本モンゴロ民族博物館
8. カバンストリート
9. 海辺の観光地
10. 山間部の観光地
11. その他（ ）

#### 問5 コウノトリの郷公園を訪れた理由は何ですか。1つ選んで下さい。

1. コウノトリへの興味・関心から
2. 自然や環境について学ぶため
3. コウノトリの写真撮影
4. 有名な観光スポットだから
5. ツアーの一部だったから
6. 旅行中にたまたま知ったから
7. その他（ ）

#### 問6 コウノトリの郷公園（戸島湿地を含む）を訪れるのは何回目ですか。 回且

#### 問7 コウノトリの郷公園についてどのようにして知りましたか。（複数回答可）

1. テレビ・ラジオ
2. インターネット
3. 新聞・雑誌
4. 旅行ガイドブック
5. 観光パンフレット
6. 旅行会社のチラシや広告
7. 友人・知人からの口コミ情報
8. その他（ ）
9. 知らなかった（豊岡に来て初めて知った）

#### 問8 今回にかぎらず、あなたが旅行で重視することは何ですか。主なもの3つ選んで下さい。

1. 予算
2. 同行者
3. 食事
4. 歴史・文化に触れる
5. 自然・景色を楽しむ
6. 知識・情報を得る
7. 人との出会いふれあい
8. 活発な行動や体験
9. 日常にはない刺激
10. 心身の余裕・ゆとり
11. その他（ ）

裏面に続きます。

#### 問9 普段の生活の中で環境問題や自然保護について関心がありますか。

1. とてもある
2. まあある
3. どちらともいえない
4. あまりない
5. 全くない

#### 問10 コウノトリの郷公園（戸島湿地を含む）の満足度はどうですか。

1. とても満足
2. まあ満足
3. 何ともいえない
4. 少し物足りない
5. かなり物足りない

#### 問11 コウノトリの郷公園（戸島湿地を含む）について良かった点、改善すべき点を教えてください。

#### 自由記述

#### 問12 コウノトリの野生復帰について、以前から知っていましたか。

1. 知っていた（ある程度の内容も知っていた）
2. 話には聞いていた（野生復帰の努力をしていることは知っていた）
3. よく知らなかった
4. 全く知らなかった

#### 問13 コウノトリについてもっとも印象に残ったことは何ですか。

1. 実際に見た姿
2. コウノトリの生態
3. 生息環境の変化
4. 野生復帰の取り組み
5. 地域社会の共生に向けての努力
6. 野生復帰に関わる人たちの思いや熱意
7. コウノトリにちなんだ農産物やお土産など
8. その他（ ）

#### 問14 コウノトリと共生する地域づくり活動に、参加したい（応募したい）と思いませんか。

- |                    | かなり<br>そう思う | やや<br>そう思う | あまり<br>思わない | 全くそう<br>思わない | どちらで<br>もない |
|--------------------|-------------|------------|-------------|--------------|-------------|
| ①里山や水辺環境づくりの市民活動   | 1           | 2          | 3           | 4            | 5           |
| ②コウノトリ・ブランドの商品の購入  | 1           | 2          | 3           | 4            | 5           |
| ③コウノトリ観光の良さを人に伝える  | 1           | 2          | 3           | 4            | 5           |
| ④募金への協力や市民団体の会員になる | 1           | 2          | 3           | 4            | 5           |
| ⑤学びや遊びの活動を支援する     | 1           | 2          | 3           | 4            | 5           |

最後に回答いただいた方についておうかがいします。

#### 問15 性別

1. 男性
2. 女性

#### 問16 年齢

1. 20歳未満
2. 20～39歳
3. 40～59歳
4. 60歳以上

#### 問17 職業

1. 自営業・事業主・農業
2. 会社員・公務員
3. パート・アルバイト等
4. 学生
5. 主婦・主夫
6. 定年後など
7. その他（ ）

#### 問18 居住地（ 都道府県 / 市町村）

ご協力ありがとうございました。